『広島平和科学』12（1989）　pp. 35－52　ISSN 0386-3565
Hiroshima Peace Science 12 (1989)

歴史意識における暴力

森　祐二
広島大学平和科学研究センター

Violence in Historical Consciousness

Yuji MORI
Institute for Peace Science, Hiroshima University

はじめに ― 攻撃性と暴力とのあいだ

1989年6月，ユネスコは“peace in the minds of men”という会議を開催した。そこで議論された中心問題のひとつは暴力につてであった。この議論で主催者側が基調としたのは，暴力は人間にとって本能のようなものではないということであった。会場の議論は，しかし，家庭・社会・国家でいかに暴力が多いかという点に集中した。主催者の意図が，暴力が人間の本能でないからには家庭・社会・国家における暴力をなくすることができる，ということにあることは理解できたけれども議論はかならずしも嚙み合ったものとはならなかった。さらにいえば，なにを今更，暴力が人間の本能でない，などといいだすのかというのが率直なところ現場にいての感想であった。だがしかし，問題がそれほど単純ではないことに気づくのに時間はかからなかった。

というのは，この会議中の一夜，インフォーマルな集会で，IPRA（国際平和学会）製作のスライド“violence and nonviolence”をみる機会があった。そのなかで，幾度となく肉食獣が草食獣を襲撃してまさに屠らんとして血のほとばしる絵があらわれた。説明はなかった。暴力の典型として描かれているとの印象をもったのは間違っていなかったであろう。とすると，本能のままに行動する動物は暴力的であるが，人間の暴力行為は動物のそれとは違うというのか，それとも，暴力は動物にも人間にも本能的に備わっているので人間はそれがあらわれないように努めなければならない，というのか説明がないままであった。これは，人間の根源的衝動としての攻撃性ということは，セックスとともに科学的理論ではなくむしろ神話であるとしたFreudの言明[1)]を思い出させる。

ところが，Freudの言明にもかかわらず，攻撃性が動物にも人間にも根源的な性質として世間的にも復活したのはLorentzの攻撃性についての著書であった。[2)]その結論とするところは，攻撃性は動物にも人間にも等しく備わったものであるが，人間だけが同種である相手を傷つけ殺すにいたる，というのであった。ときはベトナム戦争のまっただなかであった。この有名な動物行動学者の説はたちまち学界のみならず広く世間を巻き込んで人間行動の攻撃性は一世を風靡した。しかし，この攻撃性というのは，動物行動を説明するための一概念である。

たとえば，順位制社会での行動（ニワトリの pecking のような），リーダー制社会でのボス決定の行動（ニホンザルの群れのような），縄張りの主張（アユのとも釣りにみられるような），さらには，子犬同士じゃれあって仲良しになるようなことまで攻撃性の概念には含まれているのである。それらの行動はすべて動物社会の秩序を保つためのコミュニケーションのすがたである。言葉がなければ行動で示すしかないではないか。Lorenz はもちろん，この事実を重視はした。しかしこの動物行動の概念をそのまま人間行動にまで広げてしまったのである。そして人間だけが攻撃行動において他人を傷つけ殺すようになったとした。その思想のもとをなすのは Darwin から Freud へとつづく系譜である。つまり，ごく簡単にいえば，動物と人間を結ぶ進化論，生存闘争，そして攻撃性ということになる。

このような概念の枠組みのなかでもっとも明瞭な攻撃行動の一例として肉食獣が草食獣を攻撃するというのがある。だがこれは動物行動学が攻撃概念を導入する以前からのごく一般的な用語法であった。しかも，先に紹介したスライドのように，それが暴力を連想させるとなればことは決して単純ではない。生存闘争—攻撃性—暴力と意識のなかで，おそらく無意識のままに連想の糸がつながるのである。問題はここにある。結論からさきにいえば，それは食物連鎖のひとつの環である。それをわわれが生存闘争として理解するのは Darwin あるいは19世紀社会進化論によるからである。現在このような単純な生存闘争観のかげはうすくなったようにみえる。ところで，わが国のマスコミでは，たとえば，ライオンがシマウマを襲って屠る映像に自然の厳しさとか，生きることの厳しさといった説明を加えているのである。それが生存闘争観から一歩前進したものであることは十分に理解できるにしても，食物連鎖という自然の秩序の一環を説明していない。ところが，さきの IPRA のスライドのように，暴力の印象を与えるとなれば，自然の秩序どころかそこに価値観や道徳観が忍びこむ恐れは決して小さくはない。このような議論は，実は，前世紀にすでに問題とされたことであった。T.H. Huxley[3] は肉食獣が草食獣を屠るのは道徳的でも不道徳でもなく，道徳には関係なく無道徳だと論じた。これが Darwin の進化論をめぐる大論争，進化論はキリストの教えに反するか，道徳に反するかという当時の大問題の一環として

なされたものであった。いいかえれば，人間社会の価値観でこの行動を解釈するかどうかという問題であった。今日，この問題に決着がついている事いうまでもないが，おなじような問題が今日的用語法によって問題関心を移してむしかえされているように思えてならない。それが攻撃性と暴力である。というのは攻撃性も暴力も道徳性ほどにあからさまな価値観と結びつてはいないけれども，やはりそこには価値観が複雑に絡みついている。良い攻撃性と悪い攻撃性という使い方は普通に使われている。暴力の価値が悪のほうに大きく傾いていることは確かとしても，幼い子供達の喧嘩が子犬同士のじゃれあい，咬みあい（これは攻撃行動の一種とされる）と同じような意味をもってコミュニケーションのひとつである場合まで暴力とはいえないであろう。とすれば，暴力にも良い暴力と悪い暴力という使い方をしなければならなくなる。殊に，人間行動の科学的概念が日常の言語を使うときの一種の曖昧さはこの例でも十分に理解されるであろう。だからといって人間行動を，物理学の概念のような客観的な概念だけで構成できるかどうか。この問題は，ここでの議論の範囲を越えるからこれ以上は触れないとしても，仕事とか力とか日常言語を使う場合でも，物理学では客観的に概念は定義できる。

動物行動学の概念としての攻撃性が，Freud の攻撃性と結びついて人間行動の概念として広く普及した背景にはベトナム戦争があった。ベトナム戦争が終結するにおよんで攻撃性論議は下火になった。それに代わって登場したのが暴力である。しかし，暴力という言葉は攻撃性のように科学的に一応の定義をされて使われたことはなかったように見えるが，学問的に使う努力がないわけではない。構造的暴力という概念がその一例である。それは国家や社会の暴力機関とか暴力装置とかいわれるものよりも広く，国家や社会のなかに組み込まれている暴力的なものをすべて含む。また，そこに構造主義哲学の影を感じさせることがこの概念を魅力的にしている。だがしかし，構造的暴力概念の範囲が明らかにされないかぎり科学的概念とはいえない。すべてを含む式の概念は科学においてはきわめてやっかいなことになるのである。ライオンがシマウマを屠るのは自然の構造的暴力の一例にされかねない。というのは，この行動こそ自然の秩序のなかに不可欠の要素として組み込まれているからである。もしも構造的暴力概念のこのような使われ方がされるならば，科学の退行としかいいようがない。さきにふれたスラ

イドをみて危惧の念をもった理由のひとつがこのことであった。

精神分析学によれば攻撃性には良いものと悪いものとがあるとされる。そこには価値判断がある。人間の心理ではすべてではないにしても価値判断が含まれるのは当然である。攻撃性が，Freud によって人間の根源的衝動としては科学的というよりもむしろ神話的概念とされたにもかかわらず，科学的概念として認められたのは Lorenz の動物行動学によるところが大である。動物の攻撃行動とされるものは，人間行動にみられる攻撃からのアナロジイによって導かれたものであって，動物の攻撃行動から人間の攻撃性が導かれたのではない。それゆえに，動物では攻撃行動はコミュニケーションや秩序形成のために，いわば，異常事態の場合をのぞけば良いこととして働くのに，人間では良いこと（スポーツのような）にも悪いことのためにも働くとされるのである。しかも，人間の攻撃性については相手を傷つけ倒す悪についてもっぱら論じられるのが実状といっても過言ではない。

いっぽう，暴力はもっぱら人間行動について使われているように見える。しかも，格闘技を暴力といわないからには，暴力は悪である。ところが，先に紹介した IPRA のスライドのように動物行動との間につながりがあるとするならば，あるいは，つながりを想像させるとするならば，暴力の概念に混乱を持ち込む以外のなにものでもない。だが，ことはそれほど簡単ではない。はじめに紹介した Lorenz の動物行動に関する著書の題名は“悪の自然誌”であった。

以下の議論は，歴史意識といわれるもののなかに暴力がどのように組み込まれているかについてである。

意識のなかの暴力

議論をはじめるにあたって，暴力を一応定義しておく必要がある。というのは，さきに紹介したようなある種の動物行動に暴力を連想させるようなことがあってはまずいし，何よりもこの言葉は普通の日常使う言葉としてさまざまな意味をもたされているからである。たとえば，国会論戦にあらわれる数の暴力——国会の論議を論戦ということからして，同じ発想というべきであるが——とか，言論の

暴力とかいう使い方は，暴力についての議論を混乱させることになる。ここで使用する暴力は，第1に人間の行為に限る。第2，人間と国家・社会の機関が人間及びその環境に対して行使する物理的強制力である。ひとまず，この定義を以て議論をはじめるが，経験科学においては定義はその範囲をかえることがあるし，むしろ研究の深化にともなって定義の内容が豊かになり，その範囲にも変化がおこらなければならないのである。このことが公理系のうえに作られる学問との違いである。ただ，定義の内容に変化がおこるにせよ，範囲は常に明確でなければならない。

暴力を人間の範囲に限ることについては，基本的に重要な問題がある。人間の先祖が狩猟採集生活をしていたことについては説明の必要もないほどに認められている。そこには所有という関係も観念もなかった。必要とするものを必要なだけとる生活であった。自然が常にそのような生活を保証したとは限らなかったとしても，“豊かな原始”[4]などといわれる生活の原型がそこにあった。農耕生活は人間社会の構造ををそれ以前とまったく違うものとした。労働力の投下による生産活動は所有という関係と観念を生み出した。剰余の産出となれば（農耕が初めてそれを可能にした）所有，分配，管理という観念と関係は一層の発達をみることになる。こうした関係のもとで，物理的強制力を伴って他人の所有物を奪うとか，管理・支配をすることが暴力の起源とみる。戦争の起源もここにある。[5]暴力と戦争が起源を同じくすることは重要である。

社会的人間の起源がここにあるのであって，生物的人間の起源と異なる。この起源の差があいまいになっているか，あるいは，考慮されていないかが，たとえば，暴力の議論を混乱させている。いうまでもなく，狩猟採集社会と農耕社会とは非常に長い間重なりあって存在していただけではなく，今日においても，狩猟採集経済は存在している。たとえば，漁業がいかに近代的な技術を駆使しようとも一種の狩猟である部分の大きいこというまでもない。戦争を最大のこととして暴力が社会のなかに存在しつづける理由のひとつがここにあるということができる。

指摘しておきたいもうひとつのことは，こどもの発達段階の一時期における行動について，たとえば，こどものケンカについてである。身体の行動が相当に自

由になっても言葉を十分自由に操るまでになっていない時期，幼児たちは自分の意志を遂げるためにどうするか。言葉によって意志を通じたり，話をつけたりする代わりに取っ組み合いになるだろう。社会の仕組みやルールについての理解は言葉のうえでも経験のうえでも極めて不十分だからなのである。人間の精神発達のうえで言葉が決定的な役割をはたすのはいうまでもないが，それだけではなく，行動の仕方の重要性もまた欠かすことはできない。言葉と行動との密接な関係などといってしまえばそれまでのことであるが，それではなにひとつ解明したことにはならない。たとえば，さきのこどものケンカはどうか。やはり暴力に違いない。とすれば一切禁止すべきか。しかし，ある点では動物行動学的な意味をもつことを理解するのはそれほど困難ではない。ついカットシテなどということはよくある。こどもでもそうであるが，このようなことが常習的になればそれは粗暴犯であって反社会的であること言うまでもない。個人の心理と行動において暴力がそれほど簡単ではないこと，ごくごく簡単にみただけでもこのようなことである。

暴力にとって重要であるばかりでなく深刻でもある問題は戦争である。Clausewitz の有名なテーゼ――“戦争とは他の手段による外交である”――をおもいおこせば足りる。言いなおせば，交渉で決着がつかなければ戦争にうったえるということである。戦争をする権利が国際的に認められていること言うまでもない。外交交渉は単なる話し合いではない。背後に常に暴力が控えている。それは外交に限らない。政治は常に暴力を備えている。権力というものは政治に限らず暴力をそなえるといいなおしてもよいかもしれぬ。殊にわが国では，戦争について議論することはタブーとまではいわぬまでも，むづかしいようにおもわれる。戦争をしないというのは良い。しかし戦争の起源や本質につての議論が十分に発展しないとなれば，どのようなことから戦争をはじめたり，巻き込まれたりするか知れたものではない。歴史意識のなかの暴力を考えようとするのも，ひとびとの意識が戦争に傾くのを防がんがためである。

暴力も戦争もその起源を等しくすることをごく簡単に指摘した。その根は，深く人間社会の成立にまでさかのぼる。動物社会の，たとえば食物連鎖のような自然の秩序のなかにあった社会が社会的生産活動を行なうようになったときに暴力

が発生したことはさきに簡単に述べたとおりである。とすれば，暴力は，戦争ももちろん，社会の現象であって本能のような人間の体に本来的に備わったものではない。暴力がたとえ個人的にあらわれたとしてもそれは社会との関係でのことであって本能などというものではない。これは，言い方をかえて暴力を定義したことになる。

暴力が，戦争もまた，このようなものであるからには，いかに徹底的に観念のうえで否定しようとも人間社会からなくすことはできない。暴力のない社会の条件はまだまったくあらわれていない。とすれば，われわれのしなければならないことは，現在の人間社会には個人にも国家・社会にも暴力が組み込まれていることを認めたうえで，それをいかにして害の少ないものにするか，いかにコントロールするかにかかっている。

このような立場から次に歴史意識にあらわれる暴力を取り上げる。

歴史意識における暴力

ここでいう歴史意識とは多くのひとびとにとっては常には意識されないけれども，ひとたび意識にのぼるときは，漠然としたものであっても，むしろ漠然としているほどに多くの人びとに共有される，というようなものとしてとらえる。それはあたかも個人の無意識の心理作用のように常には意識されることはないが，社会の深層にあってそれとは意識されないものの，多くの人びとに共有されている歴史についての意識ということができよう。文化の深層において多くの人びとに共有される歴史観をささえているものと言いなおしたらどうであろうか。ここでは歴史意識一般を問題にするのではなく，歴史意識のなかに暴力がどのように隠されているかを考える。人間の歴史は暴力に満ちている。戦争をはじめとして社会的暴力は，神や仏，宗教や正義の名においてさえ猛威をふるったのである。それだけではなく，ナチズム，ファシズム，日本軍国主義から原子爆弾に至まで第2次大戦の歴史は人びとの思想に深刻な傷跡を残した。現在の人間にとっては，それらは後ろめたいことにとどまらず精神の荒廃をもたらしたといっても決して言い過ぎではない。そのゆえかどうか，今日人びとの歴史意識から暴力は巧みに

隠されている。

歴史意識は史書から抽出することができるし，さらに文学作品からも，哲学のなかからもそうすることはできるが，それが文化に深く根ざしたものであるからには，歴史意識一般をとり扱うためには多くの困難な分析と抽象を必要とする。重要なことはそれぞれの文化における歴史意識を明らかにすることによって，相互の理解をすすめるだけではなく，種としての人間の社会的一体性を作り上げるためにも欠くことのできない作業であるといえよう。これとて決してたやすいことではない。人類社会にとって文化は生物分類における種に相当するという考え方をかつて紹介したことがあった。[6] しかし，これから先の人類にとってそこに留まることはできないのではないか。単一の生物種としての人類と多くの種（文化）からなる人間社会との間の亀裂と矛盾は決して消滅するものではない。この亀裂と矛盾の狭間に戦争と暴力が発生したのであったとしても，だからといって今日の戦争も暴力も人間社会に対しては破壊的作用以外のなにものでもなくなっているのである。

歴史意識といってもさまざまな側面のあること言うまでもない。ここでは，非常に刺激的であるばかりでなく，われわれの歴史意識にとって有益でもあるひとつの論文を手がかりとし，かつ，導き手として議論をすすめることにしたい。

丸山真男に「歴史意識の古層」という論文がある。[7] それは記紀から始めて近代にいたる史書・史論から日本人の歴史意識の基底にあるものを抽出しようとしたものである。その方法は「直接には開闢神話の叙述あるいはその用字法の発想から汲みとられているが，同時に，その後長く日本の歴史叙述なり，歴史的出来事へのアプローチの仕方なりの基底に，ひそかに，もしくは声高にひびきつづけてきた，執拗な持続低音（Bassoostinato）を聴き分け，逆に上流へとたどった」「一種の循環論法」である。そのようにして抽出された基底範疇を連結して，丸山は「つぎつぎになりゆくいきほひ」とし，日本人の「歴史意識の古層」と名付けた。

言うまでもないことであるが，これは歴史意識の古層であってそれがそのままわれわれの現在の歴史意識をなすということではない。さまざまに多様な歴史の諸側面から抽出される歴史意識もまた多様である。まして多様な文化を創造・摂

取している今日のような状況下にあっては歴史意識もまた多様である。だが,「江戸時代の歴史的ダイナミズムが,「近代化」の一方進行ではなくて,むしろ近代化と「古層」の隆起とのふたつの契機が相克しながら相乗するという複雑な多声進行にあったのは必ずしも思想史の領域だけのことではない」というところを読むとき,江戸時代をとおくこえて今日の繁栄といわれる時代の思想のダイナミズムのことであろうかとさえ思われる。さらに,「「正統的」とされた思考範疇なり,概念用具なりは,ヨリ長期的な日本思想史の流れのなかでみれば,必ずしも強靱な伝統ではなく,逆にそうした「正統」に対する「修正」ないし「反逆」のほうが,――当事者が意識すると否とを問わず――持続低音と調和しているという歴史のアイロニーに注意を促し」ているのもまた,江戸時代に限ったことではなく,今日のわれわれのことかとさえおもわれるのである。

歴史意識のなかの暴力を探ねるにあたっても,この論文は重要な示唆を与える。それは,「いきほい」である。「日本の価値意識を特徴的に示しているのは,いきほい=徳という用法であろう」という。そして,「その徳の実質的意味は……,倫理的,規範的な観念よりは,威・勢というに近いであろう」というのは「雄略紀」に「大悪天皇也」と「有徳天皇也」という相反する表現あるところに関してである。つまり,「「徳」があるから「いきほひ」があるのではなくて,逆に「いきほひ」があるものに対する讃辞が「徳」なのである」。儒教的規範観念がすでに知られ,使われていた書紀編纂の時代に,先に紹介したように古層が隆起して正統に修正を加えた姿がここにもみらるといえないであろうか。ここでの議論の中心である戦争と暴力の日本的とらえ方にとって,いきおい=徳,という指摘はきわめて重大である。この議論にはいる前にもうひとつ紹介しておくべきことがある。

それは,「「歴史的相対主義」の花がどこよりも容易に咲きこぼれる土壌が日本にはあった」という指摘である。その論拠をここに紹介することはさけるが,古くから異文化受容によってつくられてきたわが国文化の姿を思い起すだけでもこのことは理解できよう。だからこそ,国家による歴史観の統制と強制がこれほどまでに執拗に厳しい国は少ないであろう。「勅語」や「勅諭」,「国体の本義」など旧憲法下のことは言うまでもなく,今日,国家による歴史観の直接的な強制が

不可能な状況下では，もっぱら学校教育に対して指導要領とか教科書，教育委員会通達をつうじて統制と強制が行なわれているのである。帝国主義日本のもとではもちろん，今日の民主主義のもとでも，権力は国家観や歴史観がひとつにならなければ国家と社会の一体性が保てないと思い込んでいるようである。このことを逆にみれば，国家と社会の未成熟と脆弱性のなによりの表明になっているというべきであろう。多様な価値観がありながら国家と社会の一体性を保つところに現代の民主主義が成立する。国家観や歴史観についても同じである。

もうひとつ，「つぎつぎになりゆくいきほひ」の歴史的オプティミズムについての丸山の議論をみる必要がある。それは「どこまでも（生成増殖）の線型な継起であって，ここには凡そ究極目標などというものはない。まさにそれゆえに，この古層は進歩ではなくて，生物学をモデルとした無限の適応過程としての進化（evolution）の表象とは奇妙に相性があるのである。……，ダーヴィニズムが中国においては永遠不易の「道」の伝統の強靱な抵抗に遭遇し，それだけ革命的な役割を担ったのにたいし，日本では明治初期にそれが輸入されるとまもなく「進歩」観を併呑して無人の野をゆくように蔓延し，在朝・在野を問わず，国体論者から「主義者」までを吸引したという彼我のコントラストを解明する一つの鍵」がこの「つぎつぎになりゆくいきほひ」のオプティミズムにあるとする。「こうして古層における歴史像の中核をなすのは過去でも未来でもなくて，「いま」にほかならない。われわれの歴史的オプティミズムは「いま」の尊重とワン・セットになっている。過去はそれ自体無限に遡及しうる生成であるから，それは「いま」の立場からはじめて具体的に位置づけられ，逆に「なる」と「うむ」の過程として観念された過去は不断に現在し，その意味で現在は全過去を代表（represent）する。そうして未来とはまさに，過去からのエネルギーを満載した「いま」の，「いま」からの「初発」にほかならない。」

このようなわれわれの歴史意識の「古層」の特徴は，いま，どのようにわれわれの歴史意識にかかわっているのだろうか。ことに，戦争や暴力との関係で考えてみたい。

ひとつのことは，1930年代から40年前半期にかけての戦争の時代である。それはすでに歴史研究の対象ともなる時代であるが，現在との関わりを探ってみる。

1934（昭和９）年，陸軍省新聞班は「国防の本義と其の強化の提唱」というパンフレットで，きたるべき全面戦争に備えて軍備にとどまらず，政治，経済，文化も戦争体制をとるべしとする，「広義国防」体制をとることをうったえた。殊に，「思想戦」ということが強調された。その冒頭で，「戦ひは創造の父，文化の母である。／試練の個人に於ける，競争の国家における，斉しく夫夫の生命の生成発展，文化創造の動機であり刺戟である。」と高らかにうたい上げた直ぐあとに続けて，この戦いというのは「人びと相克し，国々相食む，容赦なき凶兵乃至暴殄ではない」とはいってみたものの，戦争を職業とする彼らにあっては，「覇道，野望に伴なふ必然の帰結」であることは認めざるをえない。このあとが，意味のつながりを失った文章になるのであるが，「…帰結であり，万有に生命を認め，その限りなき生成化育に参じ，発展向上に与ることを天与の使命と確信する我が民族，我が国家の断じて取らぬところである。」という。つまるところ，戦いに対する戦いであるが，わが方は創造と文化のための戦争だと主張することによって敵よりも一段と高い立場にあるといいたいのである。そのことを，「…野望，覇道の障碍を駕御，馴致して遂に柔和忍辱の和魂に化成し，蕩々坦々の皇道に合体せしむる」などといってみても，戦争では勝つことも敗けることもあるという冷酷な事実から目をそらして，居丈高に全面戦争への道に踏み込もうとした当時の雰囲気が伝わるだけである。そのことに止まらず，うえにも紹介した進化論の受容によって日本人の思想に大きく影響を与えた生存競争―優勝劣敗という社会と人生の在り方のそれなりの合理性さえもさえも，頭から否定してかかろうとしているのである。このことは以前にも触れた[8]ところであるが，日本軍国主義思想のニヒルな退廃のさまをみる。このような，いわば超越的ともいえる優位性の主張はしょせん根無し草のようなものである。

ところで，興味をひくのは「国防は国家生成発展の基本的活力の作用である。」という，すべてに傍点が施されてある短い文である。国防とは，ここでみたように外にむかって戦争することであった。それが国家生成発展の基本的活力というのである。先にみた丸山の議論を拠り所とすれば，生成＝なる，という用字法も注目すべきであるが，活力の作用＝エネルギーの働き＝いきおい，というわれわれの歴史意識の特徴が見事にあらわれているようにみえる。「満州国」なるもの

を作ったものの，政治・軍事の安定はえられなかっただけでなく，もくろんだ資源開発もままならず経済的にも行き詰まり，駆り立てられるようにさらなる軍事的膨張を余儀なくされていた情勢のもとで作られたパンフレットであった。それを「いきおい」とみる，凡そ客観的情勢判断の欠落したこのような思想にたいしてはいうべき言葉もない。だが，戦争が「支那事変」に拡大し，ついには「大東亜戦争」にまで至る，この「いきおい」なるものは極端に大きくなった。

1943年11月５，６の両日，「大東亜会議」が東京で開催された。日本の敗北は動かしがたいところまで来ていた。参集したのは，日本，満州国，タイ，フィリピン，ビルマ，汪政権，の代表であった。この会議は「大東亜共同宣言」なるものを発したが，その解説と敷衍のために「大日本言論報国会」が編集した書物がある。[9]その共同宣言は簡単なもので，「大東亜を米英の桎梏から解放」することを宣言するが，そのためには「大東亜各国は相提携して大東亜戦争を完遂」しなければならない。そして，「道義に基く共存共栄の秩序」，「自主独立を尊重し互助敦睦の……親和」，「伝統を尊重し……創造性を伸暢」する「……文化」，「互恵の……経済発展」による「……繁栄」，「人種的差別を撤廃し……文化を交流し……資源を開放」するという５項目を掲げる。ところで，「大東亜戦争」なるものは，これらの国々が共同して宣戦布告したものではなかった。このことは共同宣言のどこにも触れられていない。満州国は言うまでもなく，中国に対しても，「大東亜戦争」よりもはるかに早くから戦争を仕掛けた日本が，激しい抵抗にあって引くに引けない状況に陥った結果の賭が「大東亜戦争」であった。アジアに植民地をもち権益をもつ西欧諸国が日本の侵出に警戒し反対したのは彼らの利益のためであったとしても，日本が欲したのはアジアにおけるそのような特別な権益であった。たとえば，「満州」は日本人の血によってあがなわれた「生命線」であると主張されたことをみれば，もはや多くの説明はいらないであろう。だが，このような主張だけでは生存闘争・優勝劣敗という一種の社会ダーヴィニズムの枠内の主張であって，日本軍国主義はこれを越えたものであることをいわなければならなかった。というのは，このような闘争と暴力の世界観を打破することこそ日本の使命であると主張したかったのである。それだけではなく，社会ダーヴィニズム的な闘争にあっては，勝負は闘争の場でつけなければならないが，日本の

軍国主義者には自信がなかったとみる。それゆえに彼らは勝敗を超越した優位に立つと宣伝しなければならなかった。そこで持ち出されたのが「八紘一宇」とか「肇国の精神」とかいうものであった。そしてそれが先に紹介した5項目の，それ自体侵略や暴力とは無縁のスローガンに結び付けられて，これこそが世界の平和な秩序であると宣伝したのである。そしてこの秩序に反する勢力があるかぎり戦争によって打破しなければならないというのであった。たとえば，「大東亜共同宣言が，わが肇国の大精神に立脚するものであり，その現実的発露に外ならぬことはいふまでもない。即ち道義立国の大本に基づき，惟神の大道を根軸とし，その普遍的な中外宣布を目的とするものと解すべきである。／掲げられた五原則を貫く精神の基底が，畏くも建国以来，歴代聖皇の祖述し垂示し給へるところの「八紘一宇」の至仁至慈なる無辺際の大愛であり，これによって東亜十億の民は初めて天日を仰ぎ，再起甦生の恵沢に浴しうるのである。」[10] というようないいかたになるのである。このように誇大妄想に類するような思想に同調しないひと，批判的，あるいは反対の人は決して少なくはなかったろう。そのような人びとに対しては，徹底的な圧迫が肉体と精神に対して加えられたために日本人はすべてこのような思想に同調するか積極的に支持するかしているように見えた。この国の建国がいつであるかは別ににしても，歴代天皇が「八紘一宇」に東亜を含めた認識をもっていたとはどうしても思われないにもかかわらずである。とするならば，建国の精神や歴代天皇の心は「大東亜戦争」の意図を正当化し権威付けるために，また，それを神聖なものとするために道具として利用されたにすぎないことになる。西欧植民地主義から東亜を開放するということもまた，日本が攻め込んでからの言い分であってみれば，植民地争奪のための戦争にすぎなかった。このようなことをくどくどといいたててきたのは，今日においてさえ，否，今日のような日本の繁栄の時代だからこそというべきであろうが，「大東亜戦争」はアジア植民地諸国の独立を早めたとか，植民地開放に触媒的作用をしたとか，あるいは，旧植民地の発展に役立ったとかの議論が日常の議論の中や政治家の発言（そのために大臣の職を失ったものもあるが彼は自分の考えが間違っていることを決して認めようとしなかった），学問的議論の中においてさえみられるからである。また，「経済大国日本」の経済活動がアジア諸国の繁栄に寄与すべしとする議論

に「大東亜共栄圏」という言葉が，もちろん軍事的意味を抜きさってのこととはいえ，使われたりする。この言葉が，あからさまな，無制限な暴力を隠した飾りものであったことを述べてきたのは，日本人が，この言葉の意味を忘れかけていることに危険なものを感ずるからであるし，さらにいえば，復活しようとしているかに見えるからである。

おわりに　——忘れるとは，そして，思い出すとはどういうことか

これまで議論してきたことは，現在の平和日本とかつての軍国日本とのかかわり方のひとつの問題である。たとえば，高等学校教科書の検定に際して文部省が「侵略」の言葉を削ったために起こった内外の厳しい批判によって，この言葉が残ったことはよく知られている。殊に明治以来，日本の海外膨張の歴史から，植民地獲得や「大東亜戦争」の姿を忘れようとし，忘れさせようとする人たちは少なくないように見える。それがこの教科書問題であった。だが，事が大きければそれだけに消しさることはできないし，忘れようとしたところで，それは無意識の領域に押し込めるだけのことである。しかも，そうすればするほどエネルギーは蓄積される。そのエネルギーが姿をかえて現在の経済進出を支えたとはいえないであろうか。それ故にこそ「大東亜共栄圏」がでてきたり，それに近い発想になったりするのだ。コトバだけを取り出してみれば結構なことといわざるをえない。だがその言葉の奥にまつわりついているものこそ問題であるにもかかわらず，それは意識下に押しこめられている。日本の経済進出に対するアジア諸国の反感，あるいは，警戒心の深い根がここのあることを忘れてはならない。さらにいえば，先に紹介した「大東亜会議」に参加した国々が，決して日本を信頼してはいなかったし，ましてや尊敬の念など微塵もなかったことをおもいおこせばたりる。その時の利害が行動や態度の基準になることを忘れてはならない。

では，教科書ではないが，「侵略」を認めれば足りるか。議論の本質が，この場合，侵略の一般論にはないことを指摘しなければならない。この点があいまいになるとどうなるか。日本はたしかにアジアを侵略した。しかし，西欧諸国はそれ以前からの侵略者であった。その侵略に対する戦争が侵略戦争になった，ある

いは，明治以来日本はアジアに対し侵略を意図してきた。日本は「加害者」であったとする，「加害者」という用語法に深刻なこだわりをもたざるをえない。交通事故でもあるまいに，というわけである。そこには何ともいいがたい，ことに処する軽さと共に突放した客観化の意図を感ずるのだ。ではどうするのだ，と問いつめられると事は決して簡単ではない。日本では早くも敗戦のその年中に「一億総懺悔」が政府の音頭とりで盛んにいわれた。現代日本社会では，懺悔はスポーツ試合に敗けた選手が髪の毛を刈って坊主頭になるほどの意味しかもたない。それは，汚職議員が選挙によって「みそぎ」をすませるという思想と大きな違いはない。敗戦以来，日本社会が，個人ではいざ知らず，植民地主義と侵略戦争の罪悪感に打ちひしがれて，その末に新しい国造りをはじめたということは絶えてなっかた。とすれば，罪悪感のなさと懺悔が加害者とむすびつくときどうなるか。交通事故ほどの意味さえ失うのである。

現在の「経済大国」日本の「繁栄」にアジアの多くの国々がつながっている。政治や経済は利害関係でつながるとしても，それでさえ摩擦は隠すことのできないほど大きくなりつつあるのに，まして，信頼や共感が，政治経済とは直接にかかわらない人びとからえられようか。「大東亜共栄圏」に賛意を表し，「大東亜会議」に参じたアジアの指導者たちの心のうちと，それほど違わない対日関係がますます強くなるのだろうか。利益関係でさえも強くなればなるほど心は離れてゆくというのは危機である。

ではどうすればよいというのか。この問いにこたえない限り，社会の深層にとじこめられた暴力と戦争のエネルギーは，ますますその大きさを増すに違いない。解決のためにしなければならないことのひとつは，歴史を「悔恨」の念をもって見なおす事のように思われる。だが，この用語は決して良いとはいえない。というのは，「悔恨」とはきわめて個人的，かつ，情緒のまつわりつく言葉であるからである。問題は歴史意識，しかも，社会のなかにある歴史意識なのだ。だが，そのようにしてみた歴史によって現在を見なおすことの重要性と，それによってもたらされた現在の日本像につては，決して十分とはいえないとしても，なにがしかの意味あることとして以上論じたごとくである。

註

1) Freud, Sigmund (1932), アインシュタインへの手紙。"War edited by L. Bramson & G.W. Goethals (1964)" 所収。
2) LORENZ, Konrad (1963), Das Sogenannte Boese Zur Naturgeschichite der Agression.
邦訳：日高・久保訳　攻撃　悪の自然史
3) HUXLEY, T.H. (1888) The Struggle for Existence in Human Society. in "Collected Essays Vol. IX (1902)"
4) たとえば，SAHLINS, Marshall (1972)，邦訳：山内訳　石器時代の経済学。ここで論じられているのは狩猟採集社会のことではないが，豊かな原始に根拠を与えるものといえよう。
5) 森祐二 (1980) 戦争の起源について　「平和学講義」所収。戦争の起源にいたる筋道のごく簡単な素描をおこない，社会的生産活動＝農耕の発生によって社会的剰余が産み出され，それをめぐって政治権力の発生と共に，集団間の社会的生産物の争奪が戦争の起源であるとした。
6) 森祐二 (1979) 社会発展の原動力としての科学技術評価の新しいわく組み：Bio-sociology からのアプローチ。広島平和科学　2。人間社会において文化は生物分類における種と相同であるという今西錦司の考え方をここで紹介した。現代科学において単一種としての人間が確立したからには，人種的偏見をとり払う強力な根拠となった。いわゆる人種的偏見は異なる文化をもつ人間と社会に対するものであるが，文化を生物分類の種と相同とする考え方は，文化の間の相違をいうのであって，決して優劣を含むものではないと主張するものである。
7) 丸山真男 (1972)　歴史思想集　6　の解説　第1章　日本の歴史観の歴史
8) 森祐二 (1985) 教育改革と行・財政改革が同時進行するとき——危機突破のパターン——。　広島平和科学　8。
9) 大東亜共同宣言　大日本言論報国会編 (1944)
10) 同上　序